諏訪市埋蔵文化財調査報告第７２集

# 市内遺跡発掘調査報告書

（平成２４年度）

－長野県諏訪市内遺跡発掘調査報告書－

２０１３．３

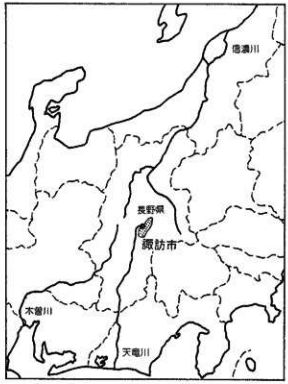
諏訪市教育委員会

# 例　言

1. 本書は長野県諏訪市市内遺跡の平成24年度発掘調査報告書である。
2. 調査は諏訪市教育委員会が調査主体者となり、教育委員会の編成する諏訪市遺跡調査団が行った。
3. 現地調査期間は遺跡ごとに記載した。整理作業は平成24年12月から平成25年3月まで、諏訪市埋蔵文化財整理室で行った。
4. 本文中における水糸レベルは可能な限り絶対標高を使用している。
5. 現場における記録と整理作業の分担は次の通りである。遺構等実測…児玉利一・赤堀彰子・古畑しずえ
   遺物水洗・注記…赤堀・古畑　遺物実測・写真撮影…児玉　トレース…田中総・児玉
6. 本書の編集は諏訪市教育委員会事務局が担当した。
7. 各遺跡の調査記録は諏訪市教育委員会で保管している。略称・出土遺物の注記は以下の通りである。
   ミシャグチ平遺跡…ＭＳＨＤ2　中道遺跡…ＮＫＭ5　大安寺遺跡…ＳＭＤ12・ＳＭＤ13
   南沢遺跡…ＭＩＮ2　昼タタエ遺跡…ＨＩＴＴ　千鹿頭社遺跡…ＳＴＫＡ10・ＳＴＫＡ11
   西沢遺跡…ＮＳＩＺ　大和遺跡…ＯＷＡ2　漆垣外遺跡…ＵＲＧ5　ジャコッパラNo.7遺跡…ＪＫＰ7-2
8. 遺構番号について、竪穴建物跡（住居跡）については過去の調査時から連続する番号とし、それ以外については調査区ごと１号から付している。
9. 発掘調査および報告書作成に際し、下記の方々をはじめ多くの方々にご指導・ご協力を得た。記して感謝申し上げる。（順不同、敬称略）
   矢﨑勇 矢﨑等 矢﨑範子 笠原建 関一重 濱幸彦 柿澤一雄 柿澤克樹 瀧澤和登 関洋治 竹松政宏
   平出訓男 花岡正明 小山信行 春宮真 宮坂勝太 大建工業株式会社 五味裕史 中島透 株式会社大同建設

# 目　次


例言・目次
Ⅰ　市内遺跡発掘調査について・・・・・・・1
Ⅱ　ミシャグチ平遺跡（第２次）・・・・・・3
Ⅲ　中道遺跡（第５次）・・・・・・・・・・5
Ⅳ　大安寺遺跡（第１２次）・・・・・・・・6
Ⅴ　南沢遺跡（第２次）・・・・・・・・・・7
Ⅵ　昼タタエ遺跡（第１次）・・・・・・・・8
Ⅶ　千鹿頭社遺跡（第１０次）・・・・・・１０
Ⅷ　千鹿頭社遺跡（第１１次）・・・・・・１３
Ⅸ　西沢遺跡（第１次）・・・・・・・・・・18
Ⅹ　大安寺遺跡（第１３次）・・・・・・・１９
ⅩⅠ　大和遺跡（第２次）・・・・・・・・・２０
ⅩⅡ　漆垣外遺跡（第５次）・・・・・・・・２３
ⅩⅢ　ジャコッパラNo.7遺跡（第２次）・・２４
報告書抄録・・・・・・・・・・・・・・・２５
写真図版・・・・・・・・・・・・・・・・２６

# Ⅰ　市内遺跡発掘調査について

## 1　今年度の発掘調査

諏訪市内には現在 240 箇所以上の埋蔵文化財包蔵地が確認されている。これらの遺跡内における開発行為は例年発生しているが、以前に多かった規模の大きな開発事例は年々少なくなり、最近では個人住宅などの小規模なものが主体となっている。諏訪市教育委員会ではこれらの開発行為に迅速に対応するため、諏訪市遺跡調査団を編成し、国庫補助事業として「市内遺跡発掘調査等事業」を実施し、埋蔵文化財の保護を図っているところである。

本年度は埋蔵文化財包蔵地内での開発行為に伴う発掘届および通知の提出は 25 件あった。昨年度と比べやや増加し、近年では最も多い件数となった。これらのうち、7 件について試掘・確認調査を実施、2 件について記録保存調査を実施し、それぞれ成果を挙げることができた。ここにその内容について報告したい。なお、中道遺跡第 5 次調査について発掘届の提出は平成 23 年度にあった。ジャコッパラ№7 遺跡については文化財保護法第 99 条により開発予定地内の試掘調査を実施した。また、ミシャグチ平遺跡第 2 次調査については、平成 23 年度市内遺跡発掘調査等事業での実施だが、調査が 3 月実施のため『市内遺跡発掘調査報告書（平成 23 年度）』に収録出来なかった。よって本書に収録し報告する。

・補助事業決定の経過（抄）

平成 24 年 2 月 10 日付け 23 生学文第 87 号

平成 24 年度国宝重要文化財等保存整備費補助金交付申請書　市内遺跡発掘調査等事業（国庫）

平成 24 年 4 月 10 日付け 24 庁財第 13 号（24 教文第 1－18 号）

平成 24 年度国宝重要文化財等保存整備費補助金交付決定通知　市内遺跡発掘調査等事業（国庫）

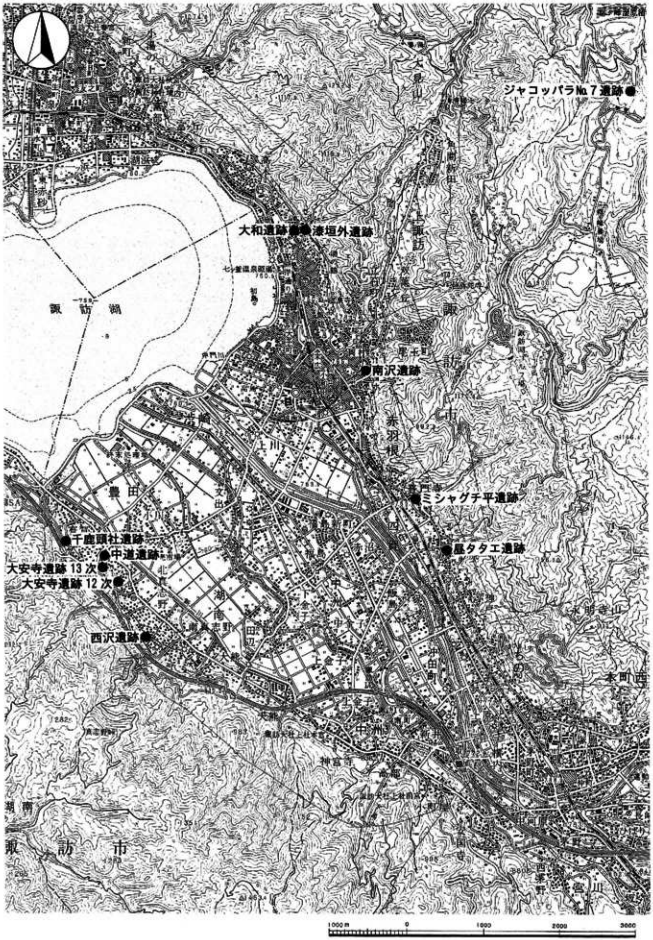
## 2　調査組織

**諏訪市遺跡調査団**

| | | |
|---|---|---|
| 団　長 | 小島　雅則 | （諏訪市教育委員会　教育長） |
| 副団長 | 高見　俊樹 | （諏訪市教育委員会　教育次長） |
| | 宮坂　光昭 | （諏訪市文化財専門審議会　委員） |
| 調査担当 | 児玉　利一 | （諏訪市教育委員会　学芸員） |
| 調査団員（調査参加者） | 赤堀　彰子・古畑　しずゑ | |

**事務局**

| | | |
|---|---|---|
| 事務局長 | 亀割　均 | （諏訪市教育委員会生涯学習課　課長） |
| 事務主幹 | 田中　総 | （諏訪市教育委員会生涯学習課文化財係　係長） |
| 事務局員 | 関沢　佳久・児玉　利一 | （諏訪市教育委員会生涯学習課文化財係） |




第1図　平成24年度調査遺跡位置図　(S=1/50,000)

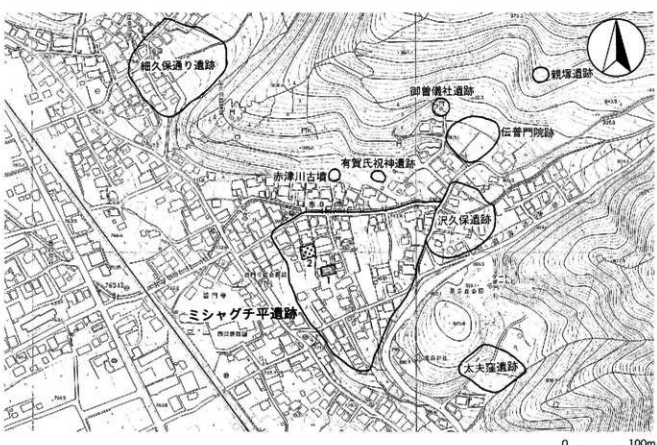
# Ⅱ　ミシャグチ平遺跡（第２次）

１．所在地　諏訪市四賀 5875－2・5
２．調査期間　平成 24 年３月 14 日～15 日
３．調査面積　4 ㎡
４．調査目的　個人住宅建設に先立つ試掘確認調査
５．調査担当　児玉　利一
６．検出遺構　硬化面
７．出土遺物　土器・石器（縄文～平安）

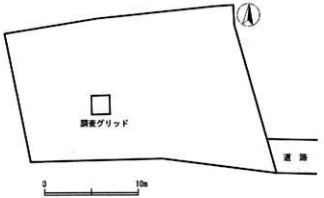
８．調査概要

ミシャグチ平遺跡は諏訪盆地東側の山裾、四賀普門寺地区内を流れる赤津川が形成した扇状地上に位置する（第２図）。四賀地区最大規模の遺跡とみられ、諏訪社大祝の祖、有員（ありかず）の居館があった場所との言い伝えもある。過去に弥生時代中期後半頃のものとみられる有孔石剣が発見され、大正 13 年（1924）刊行の『諏訪史』第１巻にも紹介されているなど、古くから遺跡の存在は知られていた。また、詳細が不明ながら弥生時代中期から後期の土器や、蛤刃・片刃の磨製石斧や磨製石鏃、合口土器棺も出土したという。過去に試掘調査が１回行われているが遺構検出は無く、遺跡の全容は不明である。

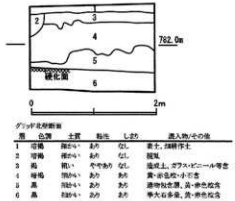
今回、遺跡範囲西側扇央部で個人住宅建設があり、事前に遺構の有無確認のための試掘調査を行った。2m×2mの試掘坑を１箇所設定し人力により掘り下げを行った（第３図）。その結果、地表下約 1.0m の黒色土層内で硬化面を検出し、遺物包含層より縄文時代から平安時代の各時代の遺物が出土した（第４図）。硬化面は西端にのみ見られ平面で遺構の掘り込みなどは捉えられなかった。硬化面を断ち割り




第２図　ミシャグチ平遺跡位置図（S=1/5,000）




第３図　調査区位置図（S=1/400）




第４図　グリッド北壁断面図（S=1/60）

第５図　ミシャグチ平遺跡出土遺物　（S=1/3）

掘り下げていったが黒色土が続いていき、ローム層まで達することが出来なかった。ただし、硬化面より下層には遺物は出土しなかった。住宅建設の予定掘削深度が硬化面より上層でおさまることから遺構の保護は可能と判断し、調査を終了した。

出土遺物は縄文時代のものがわずかに含まれるが、主体は弥生時代後期から古墳時代にかけての土器で、奈良・平安時代の遺物もわずかに出土した。第５図１は赤色塗彩された鉢である。内外面全てを赤彩し外面は縦方向のミガキを丁寧に行う。内面は横方向に細かくナデ調整している。口縁付近に焼成前穿孔の小穴が２つ開く。２は壺の頸部の破片である。細かな櫛描波状文が施文され、文様が無い部分は赤彩されている。外面は細かくミガキ、内面はナデ整形される。３は甕の口縁部である。外面は櫛描波状文が施文され、内面は横方向に密にミガキが施されている。１から３は弥生時代後期前半のものである。４は古墳時代前期初頭にみられるＳ字甕の口縁部小片である。体部は斜め方向にハケ整形され、口縁は屈曲させる。器厚が薄く鉱物粒子が多く含まれる。東海地方からの搬入品と思われる。このほか、古墳時代中期の土師器高坏や平安時代の須恵器凸帯付四耳壺が出土している。

検出された硬化面は竪穴建物跡の床面とも思われるものであったが、調査区の拡張が行えなかったことと黒色土中のため判別が難しく、断定はできなかった。１や２の土器は丁寧なミガキ調整と赤色塗彩がされている特徴から、東・北信地方を中心に出土する箱清水式土器であるとみられる。今回の調査結果から、ミシャグチ平遺跡では弥生時代中期後半から後期前半にかけての集落が推定され、過去に石剣が出土していることとも絡めて考えると、市内の弥生時代集落でも質・両ともに最も豊富といえる遺跡である。包蔵地範囲内は旧道沿いに住宅が密集しているが畑もまだ多くあり、今後の開発行為にあたっては注意を払っていきたい。

# Ⅲ　中道遺跡（第５次）

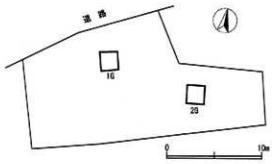
1．所在地　　諏訪市豊田中道 3431－1 ほか
2．調査期間　平成 24 年 4 月 16 日～ 17 日
3．調査面積　8 ㎡
4．調査目的　個人住宅建設に先立つ試掘確認調査
5．調査担当　児玉　利一
6．検出遺構　なし
7．出土遺物　なし

8．調査概要

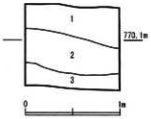
中道遺跡は守屋山麓の裾野にあたる諏訪湖西岸に位置する縄文時代から古代にかけての遺跡である（第 6 図）。周囲には十二ノ后遺跡や千鹿頭社遺跡、清水遺跡、大安寺遺跡などの集落遺跡が知られており、本遺跡を含めた一帯の遺跡群である。しかしながら中道遺跡では過去 3 度の調査で遺構の検出はなく、遺跡の詳細については分かっていない。

今回、県道諏訪辰野線の有賀峠登り口に位置する畑地で個人住宅建設予定があり、事前に試掘調査を実施した。対象地内に 2m×2m グリッドを 2 箇所設置し掘り下げを行った（第 7 図）。その結果、表土下は盛土造成土と旧水田土が確認されたが遺構などは検出されなかった（第 8 図）。また、遺物も出土していない。今回の調査地点は広い扇状地のなかでもやや谷状に窪み、また、東端の最も低い位置にあたることから遺構分布は無いないものと考えられる。これまでの調査所見もあわせると、本遺跡の主体部分は西側上方に展開しているものと考えられる。今後の調査によりさらに明確にしていきたい。

第 6 図　中道遺跡位置図（S=1/5,000）




第 7 図　調査区位置図（S=1/400）




1G北壁断面

| 層 | 色調 | 土質 | 粘性 | しまり | 混入物/その他 |
|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 暗黄褐 | 細かい | なし | なし | 表土、畑跡作土 |
| 2 | 黄褐 | 粗い | なし | 硬くしまる | 黄色粒子 |
| 3 | 暗黄 | 粗い | やや粘り | あり | 砂質、水分あり、水源土 |

第 8 図　1 グリッド北壁断面図（S=1/40）

# Ⅳ　大安寺遺跡（第１２次）

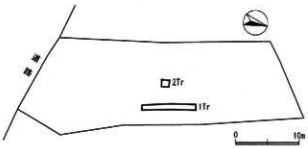
1．所在地　　諏訪市湖南境注連 7182－5・18・19
2．調査期間　平成 24 年 5 月 16 日～17 日
3．調査面積　10 ㎡
4．調査目的　個人住宅建設に先立つ試掘確認調査
5．調査担当　児玉　利一
6．検出遺構　なし
7．出土遺物　土器、石器（縄文～中世）

8．調査概要

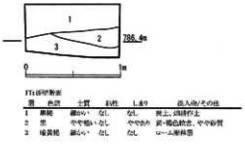
大安寺遺跡は諏訪湖南西の守屋山塊末端部広がる集落遺跡である（第 9 図）。北東から東向きの緩斜面で、遺跡南側に中ノ沢川が流れており扇状地を形成している。遺跡の大半は畑地であるが宅地化も進んできている。西側の中央自動車道を境として本域遺跡となり、多くの遺構が検出されている。過去 11 度の調査が実施され、縄文時代中期から後期、弥生時代後期の竪穴建物跡が検出されている。特に縄文時代後期の遺構・遺物が多い。

今回、遺跡範囲南端の中ノ沢川沿いに位置する畑地を造成し個人住宅を建設することとなり、事前に試掘調査を実施した。対象地内に南北にトレンチを設定し重機により掘り下げを行った（第 10 図）。その結果、1 トレンチでは少量の遺物が出土したものの、遺構は検出されなかった。大きな岩がいくつもあり、二次堆積ロームが厚く堆積していることが確認された（第 11 図）。斜面上方は 2 トレンチとして設定し掘り下げを開始したが、過去に切土造成されており 10cm程度の表土直下が二次堆積ローム土であり、遺構などは無いと判断された。調査区全体では縄文土器と黒耀石剥片数点、内耳鍋片が出土した。当該地は大安寺遺跡のなかでも集落の末端か外側になるような土地であるとみられる。ただし、周辺には古墳が点在しており今後も注意して調査にあたりたい。

第 9 図　大安寺遺跡位置図（S=1/5,000）




第 10 図　調査区位置図（S=1/600）




第 11 図　1 トレンチ西壁断面図（S=1/40）

# V　南沢遺跡（第２次）

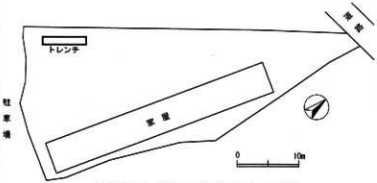
1．所在地　諏訪市元町 5767－1・7・8
2．調査期間　平成 24 年 6 月 11 日
3．調査面積　6 ㎡
4．調査目的　集合住宅建設に先立つ試掘確認調査
5．調査担当　児玉　利一
6．検出遺構　なし
7．出土遺物　土器（古墳～平安）

8．調査概要

南沢遺跡は諏訪湖東側の角間川左岸に広がる扇状地上、西向き緩斜面に位置する（第 12 図）。上流には若宮・穴場・唐沢などの集落遺跡があり、東側の台地上には一時坂古墳などがある。また、遺跡付近は正願寺・貞松院・高国寺など寺院が密集しており墓地も多い。また、早くから宅地化が進み田畑地はほぼみられない。1993 年に 1 度試掘調査が実施されてはいるが、遺跡の範囲・性格とも不明である。

今回包蔵地範囲の南側で集合住宅建設があり、事前に試掘調査を行った（第 13 図）。1・2 層の表土下には過去の水田土があり、90cm下あたりから暗灰色の泥質土、さらに 140cm下層には白色の粘土質の土層が 10cm程度の厚さで全体に確認された（第 14 図）。4 層と 5 層の境では樹木片（木材片か）が出土した。細い枝のようなものや棒状のものもみられたが、人工的なものかは判別できなかった。遺物は 3・4 層からミガキ暗文の入る土師器坏の破片、内面黒色処理された土師器が数点出土した。時代は古墳時代と平安時代がある。地下水位が高いため表土下 60 ～ 70cmより湧水があり、2mまで掘り下げたが水没してしまうほどに水量があった。当該地は低地部に近かったが遺物が出土することから遺構が存在する可能性もあり、今後も注意を払いたい。

第 12 図　南沢遺跡位置図（S=1/5,000）



第 13 図　調査区位置図（S=1/600）

第 14 図　トレンチ西壁断面図（S=1/40）

# Ⅵ　昼タタエ遺跡（第１次）

１．所在地　　諏訪市四賀山崎 4317－1
２．調査期間　平成 24 年 6 月 18 日～ 20 日
３．調査面積　8 ㎡
４．調査目的　賃貸住宅建設に先立つ試掘確認調査
５．調査担当　児玉　利一
６．検出遺構　土器集中、竪穴
７．出土遺物　土器（縄文～平安）

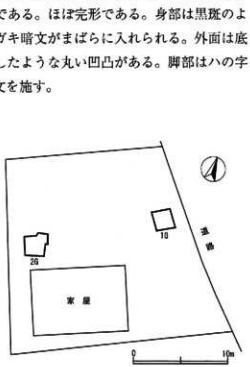
８．調査概要

昼タタエ遺跡は別名別沢遺跡とも言い、四賀桑原地区の仏法紹隆寺のある扇状地扇央部に位置する（第 15 図）。別沢川に起因する扇状地は仏法紹隆寺あたりから昼タタエ遺跡までは緩やかな斜面であり、遺跡より西側は傾斜がやや急になり低湿地に下り至る。遺跡名称は諏訪神社上社の「昼濯えの神事」が行われた場所とされていることに由来する。

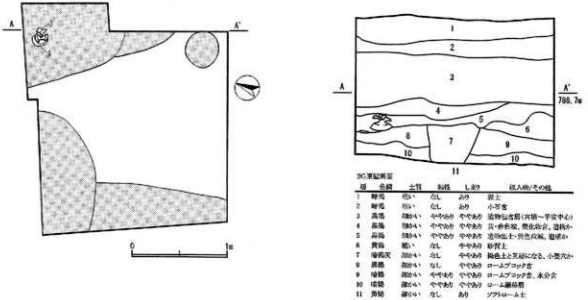
包蔵地範囲外側の宅地において戸建の賃貸住宅の建設計画があり、範囲確認のための試掘調査を行った。対象地内に 2m×2m の試掘坑を東西に 2 箇所に設定し掘り下げを行った（第 16 図）。1 グリッドは切土造成され撹乱も受けていた。遺物が少量出土したが遺構は確認されなかった。2 グリッドは斜面下方にあたり、黒色土が約 1m 堆積していた。表土下より遺物出土は多く、やや砂質のローム層まで掘り下げたところ、遺構平面が複数切り合いながら確認された（第 17 図）。グリッド北東隅で土師器高坏と小型壺が積み重なって出土した。一番下に甕の体部と脚部の無い土師器高坏身があり、その上に完形の土師器高坏が逆位で乗り、さらにその上に土師器小型壺が乗っていた。調査期間の都合で調査区の拡張がわずかしか行えず遺構の性格は明確にし得なかったが、意図的に配されたことは確かであり、供献祭祀的な性格も想起されるものである。遺構覆土や包含層中からは個体復元できない土師器高坏片が定量出土しており、甕・壺の破片も多くある。遺物の年代は古墳時代中期 5 世紀後半とみられる。

出土遺物は縄文時代と弥生時代の遺物は数点出土、中心は古墳時代中期遺物で平安時代遺物が包含層（3 層）に集中して出土した。第 18 図 1 は逆位で検出された土師器高坏である。ほぼ完形である。身部は黒斑のような黒色で歪みがある。ハケ整形したのち内外面とも放射状にミガキ暗文がまばらに入れられる。外面は底部と体部の境で粘土貼り付けによる段をつけている。器面は発泡したような丸い凹凸がある。脚部はハの字に広がり端部はさらに外反させている。外面にまばらにミガキ暗文を施す。

第 15 図　昼タタエ遺跡位置図（S=1/5,000）




第 16 図　調査区位置図（S=1/400）




第17図　2グリッド遺構図　(S=1/40)

第18図　2グリッド出土遺物　(S=1/3)

2は脚部の欠損した土師器高坏身である。精緻な胎土で雲母粒子と白色粒子を含み、焼成が良好で鈍い光沢のある赤褐色のきれいな仕上がりである。内面は細かなミガキを密に施し、外面は放射状にミガキ暗文を加える。底部と体部の境はやや段をつけて屈曲させる。1と比較すると胎土・整形・焼成いずれも異なっており、製作者(地)が明らかに異なる。3は1の上に乗っていた小型壷である。底部が欠損する。胎土は鉱物粒子が多く含まれやや砂質で焼成はやや不良。口縁部と体部外面はハケ整形痕を明瞭に残し、その上に縦方向のナデ整形を行う。体部内面は指ナデ整形している。当地方の該期にみられる小型壷とは胎土・成形技法が異なっており搬入品の可能性がある。4は包含層中(3層)より出土した8世紀末から9世紀初頭頃の甲斐型土師器坏である。ほぼ完形で、底部に墨書で「氷」の一字が記されていた。口縁に煤が多量に付着しており、灯明具として用いられたとみられる。底部は回転糸切り離し後手持ちのヘラ削りを行い、体部下端にまでおよぶ。内面には放射状暗文を施す。墨書と使用用途に関連があるのか不明だが、何らかの行為に使用されたものである。

本遺跡での初めての調査であったが、多くの遺物が出土しその内容が祭祀的行為をうかがわせるものであったことは驚きであった。この検出内容が遺跡名の「湛え」と関連があるかの判断は尚早であるが、古墳時代中期と平安時代の2時期で何らかの行為があったことは重要である。試掘結果を受けて事業者とは保護協議を継続中である。周辺地も含めて注視していかなければならい。

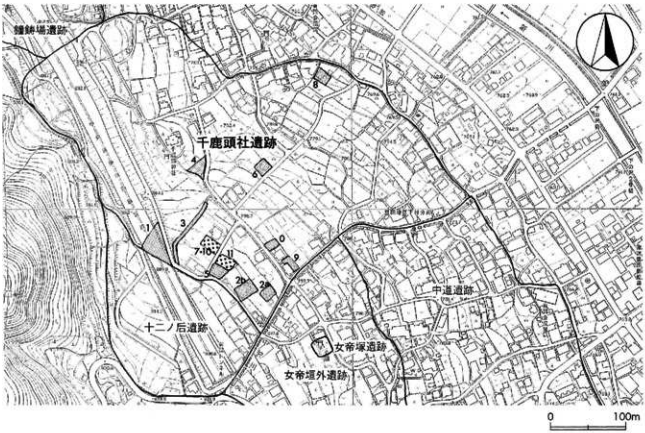
# Ⅶ　千鹿頭社遺跡（第１０次）

1．所在地　　諏訪市豊田十二ノ木 3967－1
2．調査期間　平成 24 年 6 月 27 日～7 月 11 日
3．調査面積　21 ㎡
4．調査目的　個人住宅建設に先立つ記録保存調査
5．調査担当　児玉　利一
6．検出遺構　竪穴建物跡
7．出土遺物　土器、陶器、石器（縄文～平安）

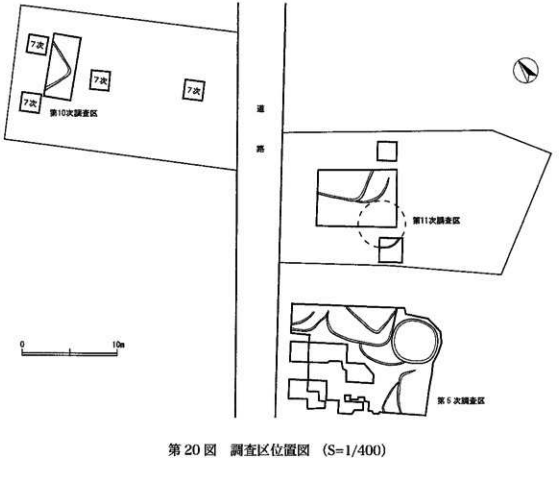
8．調査概要

千鹿頭社遺跡は諏訪湖西側の緩斜面に立地する集落遺跡で、有賀峠直下に広がる中沢川の扇状地上にある（第 19 図）。有賀峠は諏訪盆地と伊那谷を結ぶ交通の要所として知られ、古代官道の推定ルートにもなっている。南西に接する十二ノ后遺跡とは一体の遺跡で、縄文時代から平安時代に至るまで、大規模な集落が形成されている場所である。過去に 9 度 11 地点において調査が実施されており、とくに昭和 49 から 50 年の中央自動車道建設工事に伴う発掘調査で縄文時代から平安時代までの竪穴建物跡を多数検出し、各時代を通じて拠点的集落であった可能性が高いと考えられている。

今回、遺跡範囲西側の畑地が個人住宅建設により開発されることとなり、調査を実施した（第 20 図）。当該地は平成 15 年度に試掘調査を実施しており、平安時代の竪穴建物跡を検出していた（55 号）。住宅建設予定範囲の北側半分が遺構にかかることから事業者と協議を行ったが、遺構の現状保存がかなわないこととなり、記録保存調査を実施した。その結果、黒色土中に平安時代の遺構とみられる硬化面と遺物出土があり、さらに下層からローム層を掘り込んだ古墳時代後期の竪穴建物跡を検出した。平安時代のものは平成 15 年度に検出された 55 号竪穴建物跡と同遺構で出土遺物が接合するなどした。ただし、




第 19 図　千鹿頭社遺跡位置図（S=1/5,000）

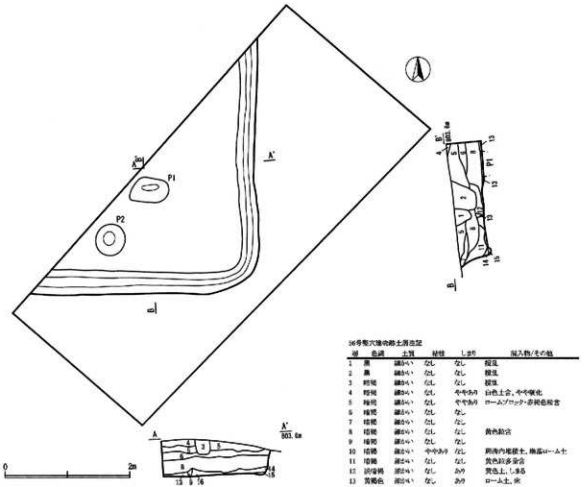



第 20 図　調査区位置図　(S=1/400)

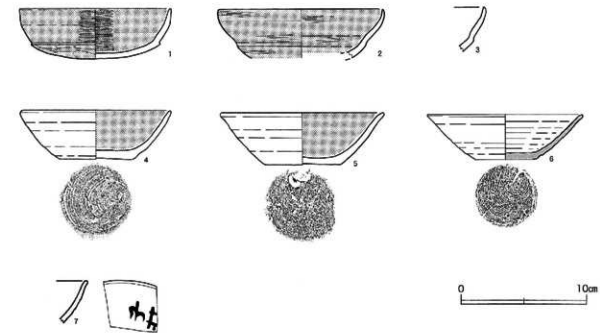
黒色土中であったことから硬化面まで重機で掘り下げた段階で把握されたため、遺構の規模がはっきりと捉えられなかった。北側調査区外に続いており、北半は残されていると思われる。下層の 56 号竪穴建物跡は南の一隅の検出した（第 21 図）。遺構の半分以上が調査区外にあるとみられる。カマドは検出されていない。掘り込みは深く、40cm以上ローム層を掘り込んでおり周溝も検出された。床面直上で薄い繊維状炭化物が面的に検出された。席のようなものの可能性もある。小竪穴が 2 基あり柱穴と推定した。遺構内覆土が厚かったわりに遺物は少なく、土師器坏や甕の破片が少量出土した程度である。

第 22 図 1 から 3 は 56 号竪穴建物跡出土の土師器坏である。1 は内外面を漆仕上げとみられる黒色処理している。底部は不定方向に削り、体部から内面は細かくミガキされている。丸底で底部端で明瞭に段をつけ、体部中ほどで屈曲させほぼ垂直に立ちあがる。内側器面には朱のような赤色が全体にみられる。2 も漆仕上げされている。外面は塗布が薄く暗褐色である。底部は削りののちミガキ、ほかは横方向に細かなミガキを施す。段はやや弱く、体部は外傾し口縁にかけて内湾している。内面にわずかに赤色がみられる。3 は黒色処理しない褐色のままの土師器坏である。精緻な胎土で焼成も良くきれいな仕上がりである。2 と器形・整形は同様である。56 号竪穴建物跡の年代は出土遺物の年代から 6 世紀後半と推定される。4 から 7 は 55 号竪穴建物跡の遺物とみられる。このほかに煮沸貯蔵具も出土している。4・5 は土師器で内面黒色処理され、底部は回転糸切り未調整。内面はヘラナデ痕が底面から放射状にみられる。6 は須恵器坏で底部回転糸切り未調整で体部は大きく開きロクロ目が顕著である。9 世紀後半と推定される。7 次調査出土のものと接合した。7 は墨書のある須恵器坏の体部である。外面に「子□」と記される。二字目は破損しており判読できない。55 号竪穴建物跡の年代は出土遺物から 9 世紀後半に位置づけられる。このほか調査区全体では縄文時代遺物が多く出土したほか、5 次調査で出土したカマド形土器の庇部分の破片が出土した。2 地点は直線で約 40mの距離がある。

今回の調査では建物跡の一部を検出するにとどまったが、多くの遺物が出土し貴重な成果が得られた。




第21図　56号竪立建物跡遺構図　(S=1/60)




第22図　55号・56号竪立建物跡出土遺物　(S=1/3)

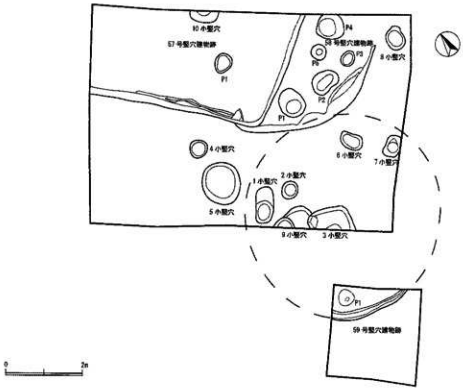
# Ⅷ　千鹿頭社遺跡（第１１次）

1．所在地　諏訪市豊田十二ノ木 3964－1・7
2．調査期間　平成 24 年 8 月 31 日～9 月 27 日
3．調査面積　59 ㎡
4．調査目的　個人住宅建設に先立つ記録保存調査
5．調査担当　児玉　利一
6．検出遺構　竪穴建物跡、小竪穴
7．出土遺物　土器、陶器、石器（縄文～平安）

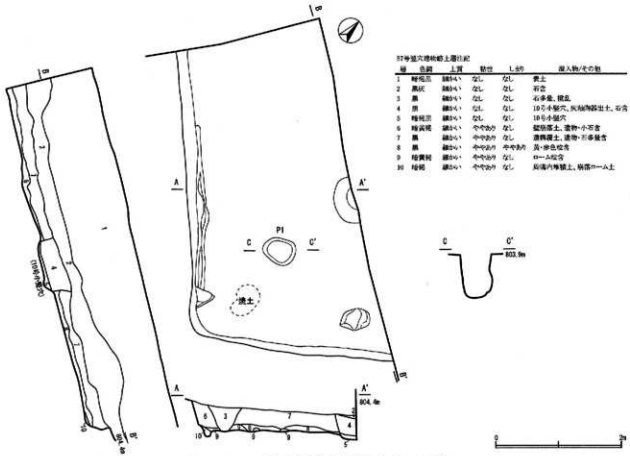
8．調査概要

第 11 次調査区は第 10 次調査区の道を挟んだ南側で、直線距離で 15mほどである。個人住宅建設が計画されたことから試掘調査を実施し、遺構・遺物を検出したことから保護協議を行ったが、設計変更が行えず保護ができないことから建物建設部分の記録保存調査を実施した。調査の結果、竪穴建物跡 3 棟、小竪穴 10 基を検出し、縄文土器を中心に多くの遺物が出土した（第 23 図）。

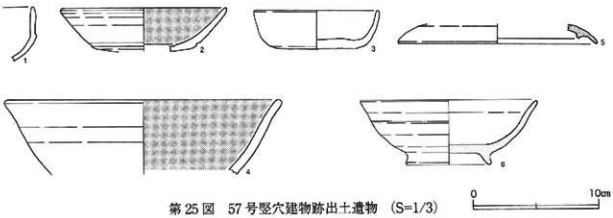
57 号竪穴建物跡は平面形が方形で南西隅を確認した（第 24 図）。ローム層を西側で 40cm以上掘り込み構築されている。規模は南北 5.3m以上、東西 3.2m以上で調査区外に延びている。遺構内覆土は黒色土で縄文土器と石が多い。柱穴とみられる小竪穴が 1 基確認された。不整円形で直径 50cm、深さ 70cmあり比較的深くしっかりと掘り込まれている。床面は硬化しておらず、地山が石を多く含む二次堆積ローム土のため凹凸がある。南西隅で焼土がわずかにみられ、調査区東壁際には平石があった。周溝ははっきりとしたものは部分的にしか確認できなかった。遺物は覆土から床面に至るまで縄文土器が多くあり、新しい時代の遺物は 7 世紀末 8 世紀初頭頃のものがある。建物跡を掘り込む竪穴が東壁中央に




第 23 図　第 11 次調査区全体図（S=1/100）



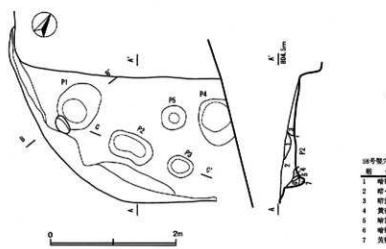

第 24 図　57 号竪穴建物跡遺構図　(S=1/60)




第 25 図　57 号竪穴建物跡出土遺物　(S=1/3)

り灰釉陶器が 2 個体出土した。10 号小竪穴としたこの竪穴は、縦 1m、横 50cm以上で、平安時代の墓壙の可能性がある。

第 25 図 1 から 5 が 57 号竪穴建物跡の出土遺物である。1 は土師器坏で須恵器坏蓋模倣の形態である。底部は削り、体部から内面はナデとミガキで仕上げている。6 世紀後半頃のもので混入遺物とみられる。2 は非ロクロ整形で内面黒色処理された土師器坏である。底部はやや丸底で削りとハケ目のような痕跡があり、体部との境に太く明瞭な沈線を入れている。内面は底部で段をつけている。出土類例がなく搬入品の可能性もある。3 は土師質で口径が 10cm程度、器高 3.1cmの小型のものである。焼成不良で脆い。底部が厚く体部から口縁にかけて薄くなる。底部外面は粗く削り調整している。内面にも削りのような痕跡が残る。体部の立ち上りは垂直に近い。器形や成形技法は該期の須恵器坏に似ているが、特異



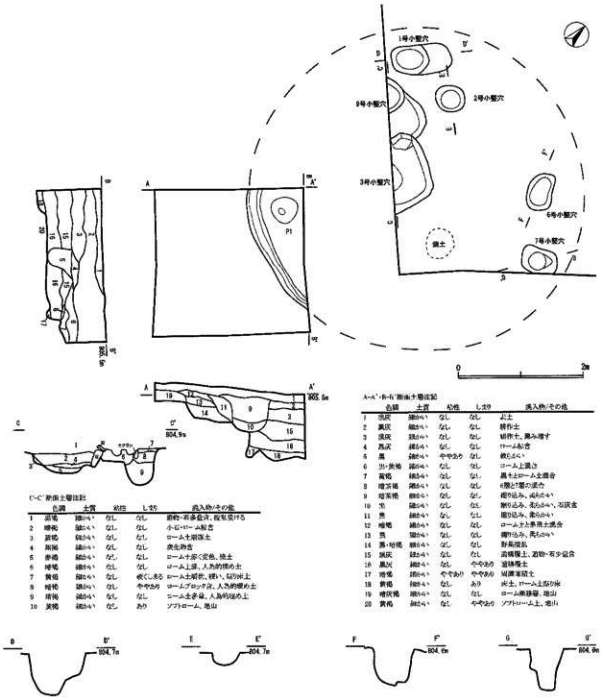

第26図　58号竪穴建物跡遺構図（S=1/60）

写真　58号竪穴建物跡出土遺物（縮尺不定）

な遺物である。4は大型の鉢と推定される。口径推定22cmでロクロ成形ののち内面は粗くナデて黒色処理する。5は須恵器坏蓋の口縁部である。内面にかえりがつく。外面は自然釉がかかる。精緻な胎土で固く焼成されている。口径は推定で16cmで、かえりは形骸化しており高台坏に組み合う器形である。東海地方諸窯産で7世紀末のものとみられる。建物の年代は、遺物の年代が不明なものもあるが7世紀後半から末頃と推定する。6は竪穴建物跡を掘り込んでいた10号小竪穴より出土した灰釉陶器塊である。半分欠損している。体部上半に淡灰白色釉が施釉され、内面は全体に自然釉もかかる。底部は回転糸切りし、ハの字に外反する三角高台を貼り付けている。口縁は体部途中からわずかに屈曲させている。精緻な胎土で成形・焼成も丁寧である。年代は9世紀後半頃とみられる。同遺構からはもう1点灰釉陶器が出土したが、底部のみで器厚が厚く成形もやや雑に仕上げているものであった。

58号竪穴建物跡は斜面上方の南西側壁面を検出し、北半は57号竪穴建物跡に切られている（第26図）。斜面下方は削平されており掘り込みが判然としない。平面形は円形で、壁は垂直に立ちあがる部分とそうでない部分がある。周溝は一部分で確認された。床面は硬化しておらずローム土のままで貼り床ではない。ピットが5基あり、P1から3は柱穴の可能性がある。P1と西壁との間に楕円形の大きな石があった。壁際を掘り込んで掘えられていたことから柱の押さえとして用いられたものかもしれない。

出土遺物は西側壁際から略完形の縄文土器が2個体出土した。また、調査区東壁際で礫と混在した状態



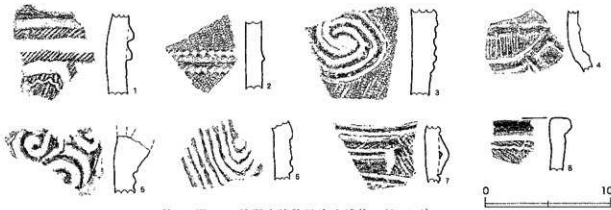

A-A'・B-B'断面土層注記

| | 色調 | 土質 | 粘性 | しまり | 混入物/その他 |
|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 黒灰 | 細かい | なし | なし | 炭土 |
| 2 | 黒灰 | 細かい | なし | なし | 粘作土 |
| 3 | 黒灰 | 細かい | なし | なし | 粘作土、黒み増す |
| 4 | 黒灰 | 細かい | なし | なし | ローム粒含 |
| 5 | 黒 | 細かい | ややあり | なし | 粘とかい |
| 6 | 黒・黄褐 | 細かい | なし | なし | ローム土混合 |
| 7 | 黄褐 | 細かい | なし | なし | 黒土ローム土混合 |
| 8 | 暗茶褐 | 細かい | なし | なし | 6層土塁の混合 |
| 9 | 暗茶褐 | 細かい | なし | なし | 褐り込み、炭らかい |
| 10 | 黒 | 細かい | なし | なし | 粘り込み、炭らかい、石灰含 |
| 11 | 黒 | 細かい | なし | なし | 褐り込み、炭らかい |
| 12 | 暗褐 | 細かい | なし | なし | ローム土と黒黒土混合 |
| 13 | 黒 | 細かい | なし | なし | 褐り込み、炭らかい |
| 14 | 黒・暗褐 | 細かい | なし | なし | 野黒褐炭 |
| 15 | 黒灰 | 細かい | なし | なし | 黒褐微土、若物・石少量含 |
| 16 | 黒灰 | 細かい | なし | ややあり | 遺構埋土 |
| 17 | 暗褐 | 細かい | ややあり | ややあり | 周囲基礎土 |
| 18 | 黄褐 | 細かい | なし | あり | 炭土、ローム土粒り炭 |
| 19 | 暗灰褐 | 細かい | なし | なし | ローム黒移層、地山 |
| 20 | 黄褐 | 細かい | なし | ややあり | ソフトローム土、地山 |

C-C'断面土層注記

| | 色調 | 土質 | 粘性 | しまり | 混入物/その他 |
|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 黒褐 | 細かい | なし | なし | 鉄粒・石多量含、粒粒受ける |
| 2 | 暗褐 | 細かい | なし | なし | 小石・ローム粒含 |
| 3 | 黄褐 | 細かい | なし | なし | ローム土層混土 |
| 4 | 黒褐 | 細かい | なし | なし | 炭化物含 |
| 5 | 黄褐 | 細かい | なし | なし | ローム土が不定色、焼土 |
| 6 | 暗褐 | 細かい | なし | なし | ローム土混、人為的堆め土 |
| 7 | 黄褐 | 細かい | なし | 硬くしまる | ローム土硬粒、硬い、切り炭土 |
| 8 | 暗褐 | 細かい | なし | ややあり | ロームブロック含、人為的堆め土 |
| 9 | 暗褐 | 細かい | なし | なし | ローム土多量、人為的堆め土 |
| 10 | 黄褐 | 細かい | なし | あり | ソフトローム、地山 |

第27図　59号竪穴建物跡遺構図　(S=1/60)




第28図　59号竪穴建物跡出土遺物　(S=1/3)

で深鉢が出土した。そのほかには破片がわずかに出土した程度である。写真1は曽利Ⅰ式期とみられる深鉢である。口縁の半分を欠損するが全体の器形・文様は分かる。キャリパー形で口縁は粘土紐貼り付けによる細隆帯縮曲文と格子文で構成され、胴部は瘤付隆帯を4単位垂下し縦位沈線文を細かく入れる。また、頸部を巡る隆帯がU字に垂下し刺突文で充填される。写真2も曽利Ⅰ式期の小型深鉢である。底部が欠損している。円筒状で口縁がわずかに開く。口縁部は4本一組の縦位沈線文を4単位施文するほかは無文である。頸部は横位隆帯と沈線を巡らす。胴部は2本一組の刻みを入れた細隆帯を垂下させる。4単位で区画し、沈線文で満たす。2点とも床面との間に間層があり、横に倒れた状態であった。建物内に置き去られ、土砂堆積する過程で倒れた可能性もある。3は東壁際で出土した土器で、底部から胴部下半にかけて残存している。器厚が厚く重量感がある。隆帯で∩字に区画した中に縦位沈線文を施文したり、刻みの入る隆帯と沈線を施文する。縄文中期中葉から後葉とみられる。58号竪穴建物跡の年代は出土遺物から曽利Ⅰ式期である。

59号竪穴建物跡は石囲炉とみられる小竪穴と建物西側の壁と床を確認した（第27図）。小竪穴が6基あり柱穴であると考えられる。調査当初の遺構確認作業では平面形を把握できなかったが、3号小竪穴として掘り下げた竪穴が方形で一辺に平石が縦方向に据えられていたことや焼土や炭化物が検出されたことから炉跡と判断した。また、西側の排水枡設置部分での調査で弧状の掘り込みと硬化した平らな面が検出されたことから床面と判断され、竪穴建物跡と推定した。壁面は垂直で周溝も検出された。硬化したローム土の床を剥がしたところ小竪穴が検出された（P1）。人為的に埋められ新たな床を構築していた。石囲炉の構築石の掘り方を確認していたところ、北側から人為的に埋められた小竪穴が検出された（9号小竪穴）。この穴も上面にローム土が層状にあり硬くしまっていた。P1・9号小竪穴の状況から建て替えを行った可能性が考えられる。炉と西壁から円を描いた範囲内に柱穴とみられる同形状の小竪穴が3基ある。調査順に1・6・7号小竪穴としたこの3基は平面形が楕円形で深さが60～70cmと似ており、59号竪穴建物跡の新しい段階の柱穴と推定する。

出土遺物は掘削中から多量に出土したが上面が耕作等によりかく乱されており、流れ込みの可能性もある。遺構に伴うと判断できるものは、炉内や小竪穴から出土したものに限った。炉内からは石と混在した状態でいくつか土器が出土した。第28図1から5は炉内出土の土器である。1･2は中期中葉とみられる破片である。1は横位隆帯に斜状沈線文を細かく入れ、隆帯内は円線を巡らし縄文と波状沈線を施す。2は縄文地文に横位の断面三角隆帯と楔形文を配す。3から5は中期後葉にかかると思われる。3は縄文地文に渦巻き隆帯を描く。4は隆帯で区画された撚糸文を施す。5は破損部分から把手の根元部分である。隆帯による渦巻き文がみられる。6は西側床面より出土した。沈線と隆帯による瘤曲文である。7・8は炉構築より以前に掘削された9号小竪穴より出土した。7は粘土貼り付けの小さな把手が付く。縄文施文される。8は角張る口縁で沈線により区画し縄文と波状沈線文を施す。炉跡内遺物より古く位置づけされる。59号竪穴建物跡の年代は出土遺物が少なく時間幅もみられるためはっきりとしないが、中期中葉から後葉と幅をもって捉えておきたい。

10次・11次調査は個人住宅建設に伴って残念ながら記録保存調査となった。結果は上述のとおりで多くの遺構・遺物が検出された。千鹿頭社遺跡は十二ノ后遺跡も含めて高速道路部分から2・3・5・10・11次にかけて各時代の遺構が確認されており、標高800～810mあたりの扇状地内でも傾斜の緩やかな一帯に集落が営まれていることが改めて確認された。近年、遺跡内での開発が多く、徐々に畑地が宅地へと変貌してきている。遺跡を保護していくために最大限の努力をしていきたい。

# Ⅸ　西沢遺跡（第１次）

1．所在地　　諏訪市湖南西沢 4767
2．調査期間　平成 24 年 10 月 18 日
3．調査面積　4 ㎡
4．調査目的　個人住宅建設に先立つ試掘確認調査
5．調査担当　児玉　利一
6．検出遺構　なし
7．出土遺物　陶器、磁器（近代）

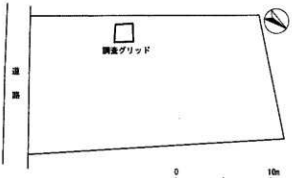
8．調査概要

西沢遺跡は諏訪湖南西の守屋山麓山裾から平坦部にいたる間に広がるやや急傾斜の扇状地にあたる（第 29 図）。風穴山龍雲寺周辺の北東向き斜面にあたり、東西約 210m、南北約 200mの範囲が縄文時代遺物の散布地として把握されているが、過去に調査が行われたことはなく遺跡の内容は不明である。

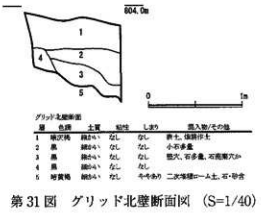
今回、個人住宅建設に先立ち試掘・確認調査を実施した。対象地内に 2m×2mの試掘坑を 1 箇所設定し、人力により掘り下げを行った（第 30 図）。その結果、近代以降の陶器・磁器片が表土・2 層より出土したが、近世以前の時代の遺物は出土しなかった。耕作土が約 20cm、その下層は石を多く含む黒色土、40 ～ 50cm 掘り下げたところから石を多く含む二次堆積ローム土層となった（第 31 図）。遺構は検出されなかった。

当該地は斜面傾斜がやや急であり、集落などが想定されにくい。西側は寺院・高速道路と急斜面に密集しており、遺跡があるような土地は見当たらない。ただし、東側は下るにしたがい緩傾斜となるため、遺跡のある可能性はある。包蔵地内に限らず隣接地も含めて遺跡の有無に注意を払っていきたい。

第 29 図　西沢遺跡位置図（S=1/5,000）




第 30 図　調査区位置図（S=1/400）




第 31 図　グリッド北壁断面図（S=1/40）

# X　大安寺遺跡（第１３次）

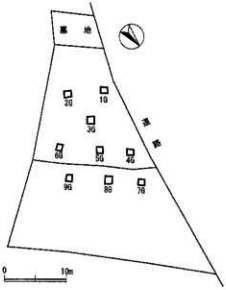
1．所在地　　諏訪市豊田平林 3589－1
2．調査期間　平成 24 年 10 月 24 日～25 日
3．調査面積　9 ㎡
4．調査目的　個人住宅建設に先立つ試掘確認調査
5．調査担当　児玉　利一
6．検出遺構　なし
7．出土遺物　なし

8．調査概要

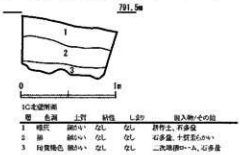
第 13 次調査区は遺跡範囲の北端で、第 12 次調査区とは正反対の位置関係である（第 32 図）。休耕畑で個人住宅建設が計画されたことから、試掘調査を実施した。対象地内に 1m×1mのグリッドを 9 箇所設定し、人力で掘り下げを行った（第 33 図）。その結果、表土の耕作土は 10 ～ 20cmで、下層はやや黒色味を増す土層、40cm程度で礫の多い二次堆積ローム土層となる（第 34 図）。斜面下方の 7 ～ 9 グリッドでは 10cm程度の表土下にローム土層が検出された。造成によってローム層上面まで削平されている状況であると判断された。

今回の調査では遺構・遺物とも皆無で、斜面地を畑地に造成したことによる削平痕跡がみられた。大安寺遺跡の集落域の北側端については、第 9 次調査区で弥生時代後期の竪穴建物跡 2 棟が検出されているため、今回の調査区との間で集落が途切れると推定される。道を挟んだ北側は清水遺跡であるが、遺構が確認されているのは斜面上方の県道沿いの土地である。今回調査区から北側にかけては扇状地の中でも下方で傾斜の強い土地に位置しており、集落形成には不適な場所であったと考えられる。

第 32 図　大安寺遺跡位置図　(S=1/5,000)




第 33 図　調査区位置図　(S=1/600)




第 34 図　1 グリッド北壁断面図　(S=1/40)

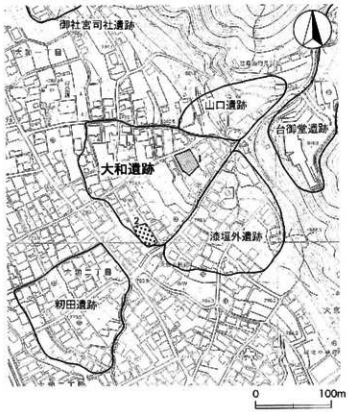
# XI　大和遺跡（第2次）

1．所在地　　諏訪市大和2－11116
2．調査期間　平成24年11月9日～12日
3．調査面積　6㎡
4．調査目的　個人住宅建設に先立つ試掘確認調査
5．調査担当　児玉　利一
6．検出遺構　なし
7．出土遺物　土器、石器（縄文～平安）

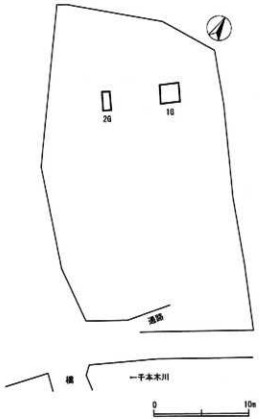
8．調査概要

大和遺跡は霧ヶ峰西山麓から連なる大見山山麓を源とする千本木川の扇状地上、諏訪湖東岸の西向き斜面に立地する（第35図）。遺跡の範囲は東西約200m、南北約150mで、平成11年度に1度調査が行われ多くの遺物が出土したが遺構の検出はなかった。ただし、千本木川対岸の漆垣外遺跡や上流の台御堂遺跡では縄文時代から平安時代にかけての遺構・遺物が検出されていることから、大和遺跡でもその存在は十分に想定されるところであった。

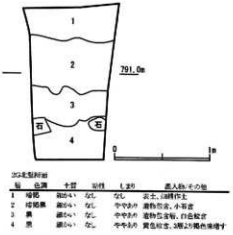
今回、遺跡範囲西端の畑地で個人住宅建設があり、事前に試掘調査を実施した。当該地あたりを境に西側が一段低くなり、諏訪湖の低地へと下り続けていく。住宅建設予定範囲に東西2箇所の試掘坑を設定し人力により掘り下げを行った（第36図）。1グリッドでは表土下の黒色土より多くの縄文土器が出土し、特に前期前葉までの土器が多く出土した。地表下90cmほどでローム漸移層となりその下からは大小様々な石を多量に含む二次堆積ローム土層が確認された。遺物は漸移層まではみられたが以下には含まれず、遺構の検出はできなかった。




第35図　大和遺跡位置図（S=1/5,000）




第36図　調査区位置図（S=1/400）



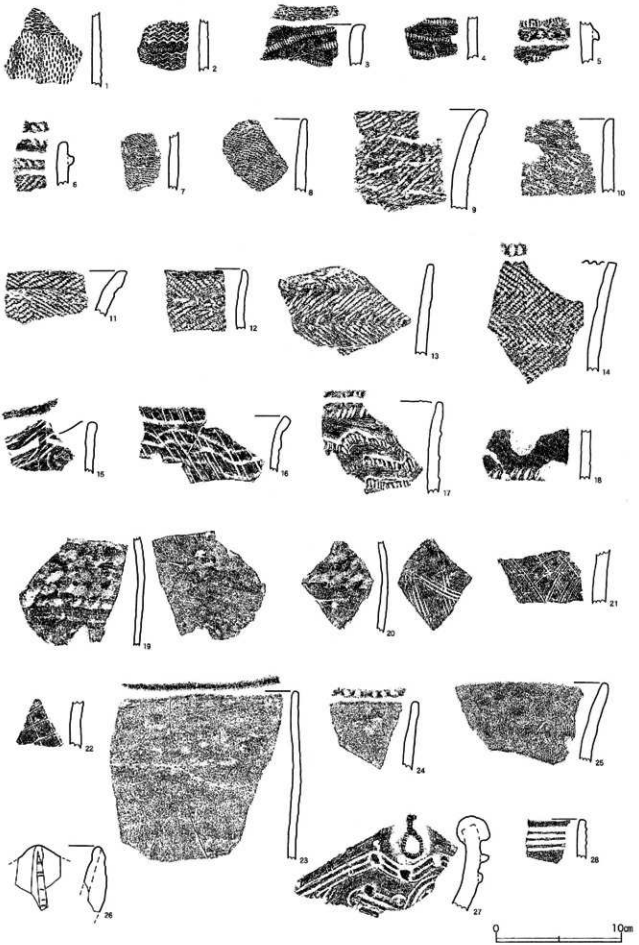

第37図　2グリッド北壁断面図
(S=1/40)

2グリッドも厚い黒色土層中から多くの土器が出土し、110cmまで掘り下げたがローム層まで確認することはできなかった(第 37 図)。工事による掘削はローム層まで達しないことが判明したため調査を終了し、基礎掘削工事時の立会により注意を払うこととした。

調査面積が 6 ㎡と狭いながら出土した遺物量は多く、コンテナ 2 箱ほどになった。しかも時期が縄文時代早期末から前期前葉に集中しており一括性もあった。出土量で最も多いのは無文薄手の中越式土器の一群である。また、黒耀石の出土も多く、石鏃、石匙が出土した。石鏃側縁上部を抉る形状のものがある。また、チャートの有茎石鏃も出土している。粗割りした原石や剥片も出土している。これらとは別に、古墳時代および平安時代頃の須恵器・土師器破片もわずかに出土している。

出土遺物のなかで特徴的なものを掲載した（第 38 図)。1・2 が押型文土器で、1 は楕円文を横方向と縦方向に施文する。2 は山形文である。早期の細久保式土器である。3 から 6 が絡条体圧痕文を有する土器で繊維を多量に含む。3・6 は口唇部にも施文する。5・6 は横位の隆帯貼り付けがある。7・8 は撚糸文施文の土器で繊維を多量に含む。9 から 14 は前期初頭の羽状縄文系土器である。9 から 11 は繊維を含み、12 から 14 は含まない。11 の口縁は帯状に肥厚させている。12・13 の口縁は指ナデし肥厚させない。14 の口縁は棒状工具で押圧し細かな山形にする。15 から 17 は早期末とみられる東海条痕文系土器である。15 は波状口縁で低隆帯貼り付けの上から斜状条痕文施文する。口唇部はまばらに刺突文がみられる。16 は平口縁で断面四角形、波状の隆帯を貼り付けてから斜めに条痕文施文する。17 は平口縁で波状隆帯貼り付け、貝殻腹縁部で細かく爪形文のような沈線を入れる。繊維を含んでいる。18 はナデにより整形された無文地に横方向の連続した爪形文を施文している。19 から 26 は前期初頭の中越式土器とみられる。指頭押圧による成形で器厚を薄くし、無文のものと沈線文を入れるものとがある。沈線文には斜状や格子状のものがある。26 は波状口縁に短隆帯を貼り付け、沈線による刻みを入れている。21 は繊維を含み、23 はわずかに繊維のような痕跡がみられる。24 は平口縁で口唇部に棒状工具で押圧して細かな施文を施す。27 は繊維を含む前期前葉の関山式土器とみられる。波状口縁で細粘土紐を環状に貼り付け先端が口縁内面に至る。隆帯に細かく沈線を入れる。胴部は半裁竹管状工具による沈線文と瘤貼付文で構成される。28 は晩期の鉢である。4 条の沈線を施文する。

今回の調査では縄文時代早期末から前期前葉の遺物が定量出土した。第 1 次調査では出土した縄文土器が中期から後期のものが中心であったのとは様相が全く異なっている。千本木川を挟んだ対岸の漆垣外遺跡でも、斜面下方の第 2 次調査区では早期末から前期前葉の遺物が定量出土しており、上方の第 4 次調査区では中期末から後期初頭の遺構が検出されている。扇状地の扇頂部は中期から後期の集落があり、扇央部から扇端部にかけては早期から前期の遺構があると推定できるだろうか。調査例は少ないが、千本木川流域の遺跡群を一体的に考え詳細に迫っていきたい。




第38図　大和遺跡出土遺物（S=1/3）

# XII　漆垣外遺跡（第５次）

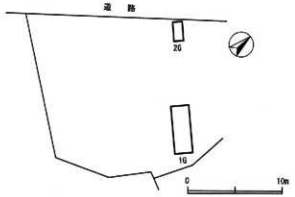
1．所在地　　諏訪市大和２－11085－１・２
2．調査期間　平成 24 年 11 月 13 日～ 14 日
3．調査面積　12 ㎡
4．調査目的　個人住宅建設に先立つ試掘確認調査
5．調査担当　児玉　利一
6．検出遺構　なし
7．出土遺物　土器、石器（縄文～古墳）

8．調査概要

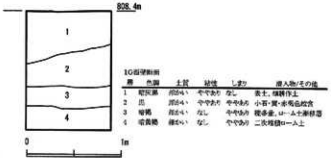
漆垣外遺跡は諏訪湖東岸にある千本木川の氾濫等により形成された扇状地に立地する縄文時代から平安時代の遺跡である（第 39 図）。この千本木川が注ぎこむ諏訪湖沖の湖底には曽根遺跡が立地している。また、本遺跡と同じ左岸上流には縄文時代前期から平安時代の集落跡が検出された台御堂遺跡が存在している。漆垣外遺跡の範囲内は宅地として早くから土地利用されていたこともあり、遺跡の内容については不明な状況であったが、近年の調査で縄文時代中期末後期初頭の敷石建物跡が検出されるなど徐々に把握されてきている。

今回個人住宅の建て替え工事があり、既存建物解体後に試掘調査を実施した。南北２箇所にトレンチを設定し掘り下げを行った（第 40 図）。その結果、当該地は既存住宅建設時の造成で黒色土は大きく動いており、また、河川氾濫などよるとみられる砂礫を多く含む堆積もあった（第 41 図）。ローム面まで掘り下げたが遺構は検出できなかった。わずかに出土した遺物は、縄文中期から後期の遺物と須恵器甕片である。宅地利用されていたこともあり土壌の状況は良くなかったが、出土遺物からは扇状地内の時代ごとの立地傾向が確認できたことは貴重である。

第 39 図　漆垣外遺跡位置図（S=1/5,000）



第 40 図　調査区位置図　（S=1/400）



第 41 図　１グリッド西壁断面図　（S=1/40）

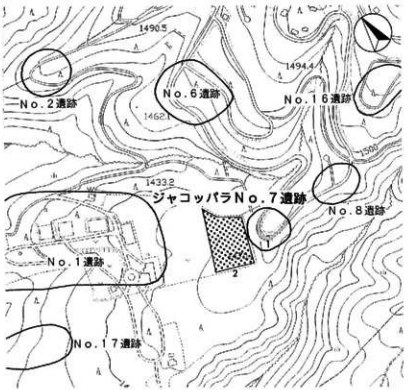
# XIII　ジャコッパラNo.7遺跡（第2次）

1．所在地　　諏訪市四賀霧ヶ峰 7718－3・67
2．調査期間　平成 24 年 11 月 28 日～ 30 日
3．調査面積　9㎡
4．調査目的　太陽光発電所建設に先立つ分布調査
5．調査担当　児玉　利一
6．検出遺構　なし
7．出土遺物　なし

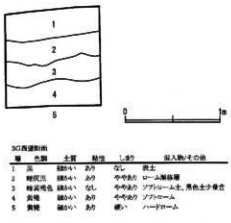
8．調査概要

ジャコッパラ遺跡群は霧ヶ峰南麓の標高約 1300 ～ 1600mに分布する 23 箇所の遺跡の総称で、旧石器時代から縄文時代を主体とする。平成 3 ～ 10 年度に行われた黒曜石原産地遺跡分布調査によって旧石器時代の石器製作関連遺構や縄文時代の陥し穴が多く検出された。そのうち、ジャコッパラNo.7 遺跡は同No.1 遺跡と同一尾根上の北側に位置し、また同No.8 遺跡からも至近の位置にある（第 42 図）。南北約 100m、東西約 80mが範囲となっているが、未調査地が多く範囲が拡がる可能性がある。表面採集により黒曜石製石核が発見されているが、平成 4 年度の市道建設に先立つ発掘調査では遺構・遺物とも発見されていない。

今回、旧牧場地にて太陽光発電所建設計画があり、事前に遺構分布確認のため試掘調査を行った。9 箇所に試掘坑を設定し掘り下げたが、いずれも遺構・遺物とも検出されなかった。堆積土層は調査区内でほぼ同じであった（第 43 図）。地表から 30cm程度の黒色土、25cm程度ローム漸移層、ソフトローム層、地表下約 1mでハードローム層に達した。調査面積がやや少ないが、黒耀石の一片すら出土しないことから、遺跡の分布は無いと判断された。霧ヶ峰高原は広大で未調査地が多くある。開発行為に先駆けて適切な対応を実施していきたい。




第 42 図　ジャコッパラ No.7 遺跡位置図
(S=1/10,000)




第 43 図　3 グリッド西壁断面図
(S=1/40)

# 報告書抄録

| | |
|---|---|
| ふりがな | しないいせきはっくうちょうさほうこくしょへいせいにじゅうよんねんど |
| 書名 | 市内遺跡発掘調査概報書（平成24年度） |
| 副書名 | 長野県諏訪市内遺跡発掘調査報告書 |
| 巻次 | |
| シリーズ名 | 諏訪市埋蔵文化財調査報告 |
| シリーズ番号 | 第72集 |
| 編著者名 | 児玉 利一 |
| 編集機関 | 諏訪市教育委員会 |
| 所在地 | 〒392-8511 長野県諏訪市高島1-22-30 電話0266-52-4141 |
| 発行年月日 | 平成25（2013）年3月25日 |

| ふりがな<br>所収遺跡 | ふりがな<br>所在地 | コード<br>市町村 | コード<br>遺跡番号 | 北緯 | 東経 | 調査期間 | 調査面積 ㎡ | 調査原因 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| みしゃぐちたていらいせき<br>ミシャグチ平遺跡 | すわし しがなかみ<br>諏訪市四賀中組<br>5875-2・5 | 20206 | 208 | 36° 02′ 64″ | 138° 13′ 22″ | 2012. 3. 14<br>～<br>2012. 3. 15 | 4 | 個人住宅建設に係る試掘・確認調査 |
| なかみちいせき<br>中道遺跡 | すわし とだなかみち<br>諏訪市豊田中道<br>3431-1・3432-1 | 20206 | 315 | 36° 01′ 97″ | 138° 08′ 70″ | 2012. 4. 16<br>～<br>2012. 4. 17 | 8 | 個人住宅建設に係る試掘・確認調査 |
| だいあんじいせき<br>大安寺遺跡 | すわし こなみさかいじめ<br>諏訪市湖南境注連<br>7182-5・18・19 | 20206 | 317 | 36° 01′ 62″ | 138° 08′ 97″ | 2012. 5. 16<br>～<br>2012. 5. 17 | 10 | 個人住宅建設に係る試掘・確認調査 |
| みなみざわいせき<br>南沢遺跡 | すわし もとまち<br>諏訪市元町<br>5767-1・7・8 | 20206 | 34 | 36° 04′ 12″ | 138° 12′ 55″ | 2012. 6. 11 | 6 | 集合住宅建設に係る試掘・確認調査 |
| ひるたたていせき<br>屋タタ工遺跡 | すわし しが やまざき<br>諏訪市四賀山崎<br>4317-1 | 20206 | 232 | 36° 02′ 03″ | 138° 13′ 71″ | 2012. 6. 18<br>～<br>2012. 6. 20 | 8 | 賃貸住宅建設に係る試掘・確認調査 |
| ちかとうしゃいせき<br>千鹿頭社遺跡 | すわし とよだじゃうにのき<br>諏訪市豊田十二ノ木<br>3967-1 | 20206 | 305 | 36° 02′ 14″ | 138° 08′ 18″ | 2012. 6. 27<br>～<br>2012. 7. 11 | 21 | 個人住宅建設に係る記録保存調査 |
| ちかとうしゃいせき<br>千鹿頭社遺跡 | すわし とよだじゃうにのき<br>諏訪市豊田十二ノ木<br>3964-1・7 | 20206 | 305 | 36° 02′ 11″ | 138° 08′ 20″ | 2012. 8. 31<br>～<br>2012. 9. 27 | 59 | 個人住宅建設に係る記録保存調査 |
| にしぜわいせき<br>西沢遺跡 | すわし こなみにしざわ<br>諏訪市湖南西沢4767 | 20206 | 330 | 36° 01′ 01″ | 138° 09′ 30″ | 2012. 10. 18 | 4 | 個人住宅建設に係る試掘・確認調査 |
| だいあんじいせき<br>大安寺遺跡 | すわし とよだひろばやし<br>諏訪市豊田平林<br>3589-1 | 20206 | 317 | 36° 01′ 79″ | 138° 08′ 70″ | 2012. 10. 24<br>～<br>2012. 10. 25 | 9 | 個人住宅建設に係る試掘・確認調査 |
| おおいせき<br>大和遺跡 | すわし おお<br>諏訪市大和2-11116 | 20206 | 3 | 36° 05′ 80″ | 138° 11′ 51″ | 2012. 11. 9<br>～<br>2012. 11. 12 | 6 | 個人住宅建設に係る試掘・確認調査 |
| うるしがいといせき<br>漆垣外遺跡 | すわし おお<br>諏訪市大和<br>2-11085-1・2 | 20206 | 6 | 36° 05′ 86″ | 138° 11′ 62″ | 2012. 11. 13<br>～<br>2012. 11. 14 | 12 | 個人住宅建設に係る試掘・確認調査 |
| じゃこっぱらないせき<br>ジャコッパラ<br>No.7遺跡 | すわし しがそうがみね<br>諏訪市四賀蒼ヶ峰<br>7718-3・67 | 20206 | 436 | 36° 07′ 50″ | 138° 16′ 37″ | 2012. 11. 28<br>～<br>2012. 11. 30 | 9 | 太陽光発電所建設に係る分布調査 |

| 所収遺跡 | 種別 | 主な時代 | 主な遺構 | 主な遺物 | 特記事項 |
|---|---|---|---|---|---|
| ミシャグチ平遺跡 | 集落 | 弥生 | 硬化面 | 土器・石器 | |
| 中道遺跡 | 集落 | | | | |
| 大安寺遺跡 | 集落 | 平安・中世 | | 土器・石器 | |
| 南沢遺跡 | 散布地 | 奈良・平安 | | 土器 | |
| 屋タタ工遺跡 | 集落 | 古墳・奈良・平安 | 土器集中・竪穴 | 土師器・須恵器・陶器 | |
| 千鹿頭社遺跡 | 集落 | 古墳・奈良・平安 | 竪穴建物跡 | 土器・石器・土師器・須恵器 | |
| 千鹿頭社遺跡 | 集落 | 縄文・古墳・平安 | 竪穴建物跡・小竪穴 | 土器・石器・土師器・須恵器 | |
| 西沢遺跡 | 散布地 | | | 陶器・磁器 | |
| 大安寺遺跡 | 集落 | | | | |
| 大和遺跡 | 集落 | 縄文 | | 土器・石器 | |
| 漆垣外遺跡 | 集落 | 縄文 | | 土器・石器 | |
| ジャコッパラNo.7遺跡 | 散布地 | | | | |


要約

・ミシャグチ平遺跡第2次：硬化面を検出。弥生時代後期前半土器出土。
・中道遺跡第5次：遺構・遺物なし。
・大安寺遺跡第12次：遺物少量出土。
・南沢遺跡第2次：遺物少量出土。
・屋タタ工遺跡第1次：古墳時代中期土師器集中遺構検出。「氷」墨書の甲斐型土師器坏出土。
・千鹿頭社遺跡第10次：古墳時代後期と平安時代の竪穴建物跡を検出。
・千鹿頭社遺跡第11次：縄文時代中期と古墳時代後期の竪穴建物跡、小竪穴を検出。
・西沢遺跡第1次：遺物少量出土。
・大安寺遺跡第13次：遺構・遺物なし。
・大和遺跡第2次：縄文時代早期末から前期前葉の土器出土。
・漆垣外遺跡第5次：遺物少量出土。
・ジャコッパラNo.7遺跡第2次：遺構・遺物なし。

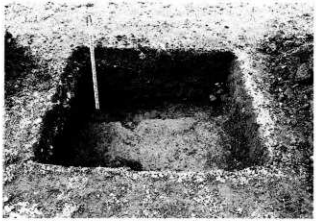
# 写真図版

# 図版 1

ミシャグチ平遺跡調査区全景（東から）

グリッド北壁（南から）

中道遺跡調査区全景（西から）

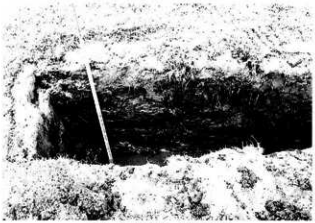


1 グリッド完掘（南から）

大安寺遺跡第 12 次調査区全景（南から）

1 トレンチ完掘（南から）

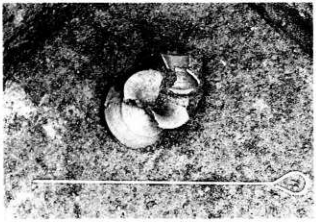
南沢遺跡調査区全景（南から）



トレンチ西壁（東から）

昼タタエ遺跡調査区全景（北から）

2グリッド遺構確認面（南から）

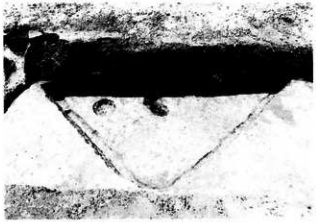


2グリッド土器集中

2グリッド土器集中下層の土器

千鹿頭社遺跡第10次調査区全景（南東から）

調査区遺構確認面（東から）



56号竪穴建物跡完掘（南から）

第11次調査区全景（南東から。右奥は10次調査区）

図版3

第 11 次調査区全景 （北から）

第 11 次調査区排水枡部分全景 （南から）

57 号竪穴建物跡完掘 （北から）

57 号竪穴建物跡完掘 （西から）

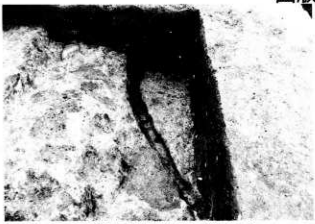
58 号竪穴建物跡 （東から）

58 号竪穴建物跡遺物出土状況

58 号竪穴建物跡完掘 （東から）

59 号竪穴建物跡炉跡 （東から）

59号竪穴建物跡炉跡・9号小竪穴（東から）

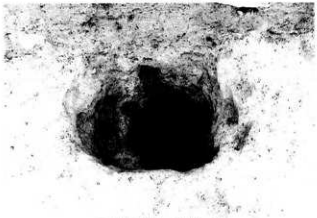


59号竪穴建物跡完掘（南から）

1号・2号小竪穴（東から）

5号小竪穴（南から）

6号小竪穴（東から）



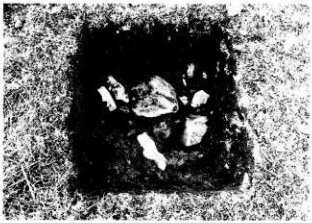
7号小竪穴（北から）

西沢遺跡調査区全景（東から）

グリッド完堀（南から）

図版５

大安寺遺跡第 13 次調査区全景 （南から）

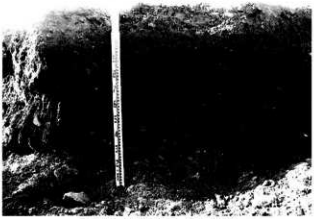


1 グリッド完掘（東から）

大和遺跡調査区全景 （南東から）

2 グリッド完掘（南東から）

漆垣外遺跡調査区遠景 （東から）

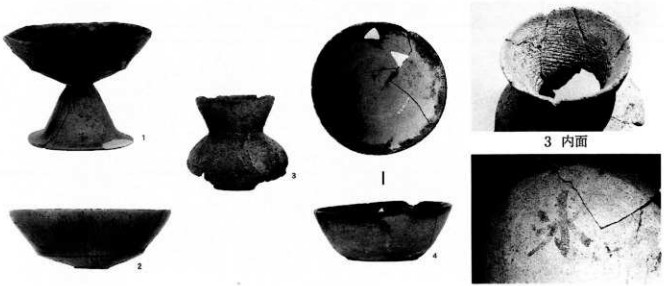


1 グリッド西壁 （南から）

ジャコッパラ No.7 遺跡調査区全景 （東から）

3 グリッド西壁 （東から）

ミシャグチ平遺跡出土遺物

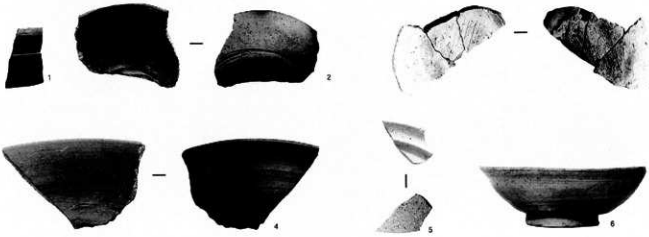


3 内面

4 底部

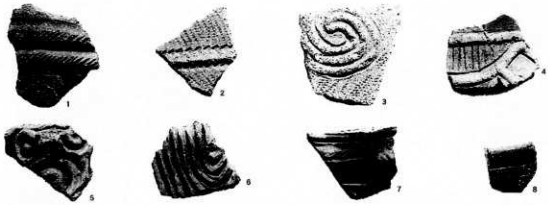
昼タタエ遺跡出土遺物

千鹿頭社遺跡 55 号・56 号竪穴建物跡出土遺物

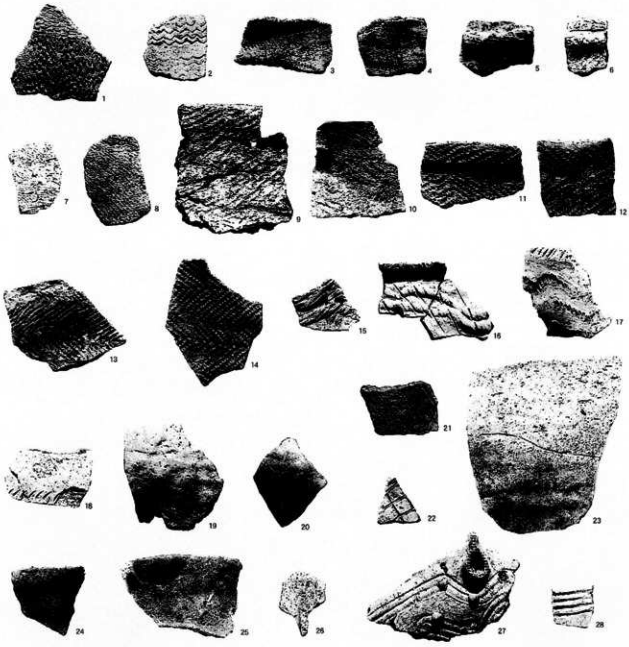


千鹿頭社遺跡 57 号竪穴建物跡出土遺物

図版 7



千鹿頭社遺跡 59 号竪穴建物跡出土遺物



大和遺跡出土遺物

市内遺跡発掘調査報告書（平成２４年度）
－長野県諏訪市内遺跡発掘調査報告書－

平成25年3月25日

編集・発行　長野県諏訪市高島1－22－30
諏訪市教育委員会
印　　刷　有限会社増澤印刷所